



R I. 第2620地区 静岡第2分区
三島西ロータリークラブ

週報

第1936号

事務所 静岡県三島市中央町4番9号 2F
TEL(055)976-6351 FAX976-6352
例会場 静岡県三島市梅名393-1 ブケ東海三島
TEL(055)984-0120
会長 野田 和秀 幹事 平出 利之



広重版画より 三島 朝霧

第1999回例会

2013.10.18晴
於:米山記念館

司 会

遠藤正幸君

ロータリーソング

「それでこそロータリー」
指揮 栗原達治君

の倒壊により、多数の人命が失われた災害です。こうした一見「想定外」の災害であっても、一旦起こってしまえば、トップの責任が問われてしまいます。今一度会社や職場での身の回りの点検を励行致しましょう。

会長挨拶

会長 野田和秀君

皆様こんにちは。今月は、職業奉仕月間でもあり、また米山月間でもあります。本日は、第2回目の米山記念館での例会にあたりゲストとして米山奨学生の呉書汎さんを東京よりお迎えして、後程卓話をお願いしています。呉さんよろしくお祈りします。呉さんの紹介は、遠藤正幸さんをお願いします。卓話の時間をしっかり確保するため、今日は手短に次の3点について触れて会長挨拶に代えます。

1.10月10日の映画「東京物語」上映会の感想文をお寄せ下さり有難うございます。西本委員長に代わり御礼申し上げます。お陰さまで週報の紙面が埋まったようです。

2.10月12日(土)にホテルアソシア静岡で、地区職業奉仕セミナーが開催され、伊丹委員長、相山さん、と私の3人で出席してきました。本日伊丹委員長欠席のため、次週委員会報告で報告あると思います。地区内クラブでのこれまでの職業奉仕活動の事例を集めた事例集が会場で渡され中身を見ますと、やはり圧倒的に工場・職場等の見学会が多いです。我がクラブも柿田川野菜工場、谷田木材の見学会を取り上げ、掲載されています。次に目に留まったのは、ロータリアンが中学校(あるいは高校、でも少ないです)へ出向き、職業講座の卓話をするといった事例です。今後の職業奉仕活動を考えていく上で、参考になると思われます。職業奉仕委員会で回覧されるとよいでしょう。

3.先日から暗いニュースが続いています。九州での病院火災、伊豆大島での台風26号による土石流による多くの家屋

“こんにちは、ようこそ”

ゲスト 呉書汎さん(米山奨学生)

出席報告

	出席総数	出席率	メークアップ	修正出席率
前々回	27/44	61.36%	34/44	77.27%
今回	30/44	68.18%	会員総数	53名

欠席者 石井(彰)君、石井(良)君、亥角君、勝間田君、窪田君、栗田君、佐々木君、鈴木(正)君、千葉君、登崎君、長田君、橋本君、原君、森崎君

幹事報告

幹事 平出利之君

- ①例会終了後、米山梅吉翁の墓参りに行きます。
- ②10月の第4例会は24日(木)です。久しぶりのブケ東海三島です。
- ③清水町町制50周年国際交流都市歓迎会が11月2日(土)ホテルエルムリージェンシーで開催される案内が清水町から届きました。
- ④伊豆魂神社例祭が11月4日(月)10時より開催されます。

2013~2014年度
国際ロータリー会長
ロンD.バートン

ロータリーを实践し、みんなに豊かな人生を

スマイルボックス

◆ゴルフ同好会、9月29日(日)朝霧ジャンボリーにてゴルフコンペを行いました。優勝矢岸さん、準優勝鈴木正二さん、3位前田房江さんでした。次回は10月26日(土)に稲取ゴルフクラブで行います。

卓 話

川に見る日本人の暮らし

慶応義塾大学文学研究科後期博士課程二年
呉 書汎さん



長野県出身の作詞家・高野辰之の「故郷」は、日本人の誰でも知っている唱歌でしょう。その歌詞「兎追ひし かの山／小鮒釣りし かの川／夢は今もめぐりて／忘れがたき 故郷」を見ると、高野辰之にとって、おそらく川は、ふるさとを象徴する景色でしょうか。彼もまた、「春の小川」「もみじ」などの唱歌を作りました。春の川や秋の川の景色が唱歌に巧みに詠み込まれています。これらの作品を通して、四季の移り変わりによって、川の姿も変わっていくことが改めて感じられます。

また、吉丸一昌の作品の中、「故郷を離るる歌」という唱歌を見出すことができます。二番の歌詞「つくし摘みし岡辺よ、社の森よ。／小鮒釣りし小川よ、柳の土手よ。／別るる我を憐と見よ、さらば故郷。／さらば故郷、さらば故郷、故郷さらば。」をみると、高野辰之の作品「故郷」に歌われる景色を彷彿させます。

以上みてきたとおり、日本の唱歌には、川に関する歌が散見されます。川は、日本人にとって決して珍しい存在ではないでしょう。また、歌われる景色は日常的な生活であるところから、日頃から、川と密接に関わって暮らしていたと考えられます。さらに、高野辰之と吉丸一昌と両者の作品を見比べると、かなり似たような表現が見られます。このような似た表現は、

決して偶然ではありません。なぜなら、二人の作詞家は共に自然豊かなところで育ち、その中で感性を磨いてきたからです。唱歌の普及にしたがって、日本人の中には、川は故郷のシンボルとして定着されつつあったと言っていいでしょう。

富山和子著『水と緑と土』では、アメリカの社会学者フローレンス・クラックホーンの話「自然を征服しようとしたヨーロッパ文化、自然に屈服したメキシコの農民文化に対して、両者の中間的存在すなわち、自然と人間との調和に築かれた文化として日本の文化を位置づけている」と紹介しています。日本の唱歌を見てきて、日本人は、まさしく川をはじめとする自然と共生しながら、そして長い歴史に渡って文化を築いてきたに違いありません。



絵画同好会作品



勝間田信輔君

(週報担当:川名正洋)